

サイエンスライターとしてのエミール・リトレ： 『哲学的視点から見た科学』の構成と序文

中筋, 朋
京都大学大学院人間・環境学研究科：准教授

<https://doi.org/10.15017/2556311>

出版情報：Stella. 38, pp.171-178, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

サイエンスライターとしてのエミール・リトレ

——『哲学的視点から見た科学』の構成と序文——

中 筋 朋

エミール・リトレの名は、一般にはもっぱら辞書編纂者として知られていよう。実際、彼の学問的背景は、独力で辞書を編纂するにふさわしい多岐にわたったものである。百科全書派の影響が色濃く教育熱心な両親によって、ギリシア語とラテン語のみならずアラビア語とサンスクリット語も学び、文学に親しみながら育ったリトレには、言語学者としての顔と同時に、医学者としての顔もある。父親の急死による経済的窮乏のために博士号の取得は断念したものの、彼は内勤研修医を務めるところまで医学の修養を積んでおり¹⁾、のちにはアカデミー・フランセーズの会員だけでなく医学アカデミーの会員にもなっている。経済的理由から翻訳家・ジャーナリストになったリトレだが、ジャーナリストとしてはオーギュスト・コントの『実証哲学講義』(1830-42年)が広く紹介されるきっかけをつくり、実証主義哲学の論者の中心人物の一人となった。『ヒポクラテス全集』や同時代のヨハネス・ミュラー(1801-1858)の『生理学概説』といった自身の専門に近い著作の翻訳とともに、とプリニウスの『博物誌』の翻訳をおこなったことは、両親の影響も大きい百科全書的な活動と言えるだろう。本稿は、知識を網羅し、諸学問の関係性を問おうとするリトレの知的傾向を典型的に示している著書『哲学的視点から見た科学』(1873年)²⁾を扱う。これは、彼がジャーナリストとして38年間に書き綴った科学書や最新の研究の紹介記事を集めた論集である。天文学から社会学にいたる広い学問範囲を扱い、563ページにわたる大著であるため、今回は研究の端緒として、序文に書かれたこの本に通底する理念と構成にみられる特徴について考察する。

学問の進化への視線——「文明の哲学」として

『哲学的視点から見た科学』に収録されているのは、1834年から1872年に発

表された 16 本の記事と 1 本の講義録である。発表媒体は『両世界評論』（6 本）やリトレ自身が創刊した『実証哲学』（6 本）、さらには『共和国評論』（2 本）、『ドイツ評論』、『ル・ナショナル』（各 1 本）である。目次が論集に収録された記事のタイトルにもなっているので、まずここに挙げておく――

序文

- 1) アレクサンドル・フンボルト『コスモス——世界を物理的に描写する試み』
- 2) 自然哲学研究論
- 3) さまざまな流星
- 4) アンペアと電磁気学
- 5) 地熱についての幾何学者たちの新しい研究
- 6) キュビエと化石骨
- 7) 地質学上の最終期のまえに地上に人間はいたのか？
- 8) 化学との関わりからみる生の科学
- 9) 生理学について——生理学研究の重要性と発展
- 10) 精神生理学についていくつかの点
- 11) 正義概念の起源
- 12) 生物学から社会学を分かち根本条件について
- 13) 古代オリエントについて
- 14) 理工科学校での最初の歴史の授業
- 15) セム族における文明と一神教について
- 16) バックル『イギリスの歴史と文明について』
- 17) 宇宙進化論についての実証的諸仮説

このうち 1), 2), 3), 6), 9), 13), 16) が本の紹介である。ただし、どれも詳しい背景説明とそこから発展する議論が書き込まれている。一冊の本から議論を展開している 15) のような記事もある。また、リトレ自身の議論が中心となっているのが 8), 10), 11), 12), 17) である。

これらの記事を一本に編纂するにあたり、彼は時系列順に収録することを選ばなかった。その理由は、収録順そのものが、科学にむけられる「哲学的視点」を体现しているからである。本の冒頭に置かれた序文で以下のように語る――

これらの小文が次のような順で並べられていることに読者のみなさんは気づかれるであろう。まずは天文学と地球に関するもの、次に物理学に関するもの、物理学の次には化学、化学のあとには生物学あるいは生き物についての理論が来る。これは生理学に従属するものとしての心理学についての小文も含んでいる。最後の部分は、歴史と

社会についての学——あるいはコント氏がつくり、そして有用なために皆が採用している新語に従えば社会学——に当てられている。

この配置は偶然の、恣意的なものではない。従属に関する一般原理に従って規則的に並んでいる。ある科学が別のある科学に従属しているというのは、この別の科学が与えてくれる概念や助けなしにはそれが成立できなかった場合を言う。これ以上に実質的な従属などないであろう。[I-II]

学問の発展の順序をなぞるように本が編まれたことに対する説明である。数学が数えられていないのが気になる場所であるが、これについては、収録した記事のなかに数学についての記事がなかったためであり、本来は「どの学問よりも前に置かれるべき」との言及がある [II]。

このような科学の序列化とその順序がコントの『実証哲学講義』とほぼ同じものである点はまず指摘しておかなければならない³⁾。ここでコントとの関係に少しふれておこう。コントは、自著を世に知らしめてくれたリトレを高く評価していたが、1851年のルイ＝ナポレオンのクーデターについての意見が食い違くと、今度は彼を貶めるようになる。リトレも実証主義協会からいったん離反するが、コントの死後にはまた復帰する⁴⁾。

序文はコントの死後の1873年に書かれているが、リトレがそこで説明する『哲学的視点から見た科学』の基本構成はコントの『実証哲学講義』に倣っている。さらにハーバード・スペンサーからコントに向けられた反論に対して、コントの擁護すらおこなわれる [IV-VI]。コントの専門家であるアニー・プティが指摘するとおり、リトレの態度は一貫していて、『実証政治大系』とは意見を分かちつもの、『実証哲学講義』には賛同しつつづけているのである⁵⁾。

リトレがコントから得たもっとも大きな影響が人間の知的営為の進展についての視線であることは、アンリ・グイエも指摘している。彼は、リトレにとってコントの哲学はそれまで欠けていた「支点」だったと述べ、この「支点」を「文明の哲学 (philosophie de la civilisation)」と言い換える。そして、文明を「人間の自然に対する活動の進化のなかにあるものであり、この進化は、自然についての知識における精神の進化を条件とする」と定義する⁶⁾。実際、リトレは先の引用の中で、学問の発展における因果関係に力点を置いている。また序文の冒頭でも、『哲学的視点から見た科学』の主眼が「科学をその進化の要所そのもののなかで (dans le nœud même de son évolution) 捉えようとする」点

にあると言及している [I]。リトレの関心が「進化の要所」という変節点に向かっていている点を強調しておきたい。

学問の学として——通時的な視点

変化・発展に対する眼差しは、リトレが1840年にコントの著作に出会って以来思考の基盤となり、その影響は1841年から着手する辞書の編纂にまで及んでいる。その辞書編纂に見られる特徴として、リトレ研究者の平尾浩一は「静的で安定したシステムよりは、[…] 動的な要素に着目し、言語の不安定な側面や通時的な発展に焦点を当てる」点を挙げる。平尾によれば、これは共時的で百科事典的な辞書が一般的だった時代には非常に新しいものであった⁷⁾。

さきほど、リトレの活動の「支点」となったのが人間の自然に対する活動の進化——とその条件となる人間精神の進化——を問うことだと述べたが、彼とコントが科学の進化に対して向ける視線には、少し異なる部分がある。リトレは本書の企みを以下のようにまとめる——

以上から、一科学の哲学と科学一般の哲学のあいだの違いがわかっていただけであろう。前者はとりわけそれぞれの科学に固有の方法論を扱う。後者は諸科学間の従属関係とともに、それが歴史のなかでいかに絶え間なく発展してきたかについて、さらにヒエラルキーの段階に応じて増していく複雑さについても扱うのである。[II-III]

彼は、この本でおこなわれるのが「一科学の哲学 (philosophie d'une science)」ではなく「科学の哲学 (philosophie de la science)」だとしている。つまりその眼目は、各々の科学がもっている特性を浮き彫りにすることにはではなく、科学という営みそれ自体が持っている運動性にある。

ここで、コントが『実証哲学講義』のタイトルの候補として、「諸科学の哲学 (philosophie des sciences)」を挙げていたことを思い起こそう。コントはこの呼称に一定の妥当性を認めながらも、最終的には、主題にかかわらず一貫して適用できる態度を指す「実証哲学」という語を選んでいる。そして自身の講義が「さまざまな科学の一般的特性 (généralités) に特化した研究」である点をあらためて強調している⁸⁾。これは、リトレの試みともほぼ共通しているが、コントの関心の中心があくまで「一般的特性」にある点に注意しなければならない。また、コントは「諸科学の哲学」と科学を複数 (les sciences) で捉え、異

なる諸分野が集まった集合体として考えたうえで、科学全体に通底する特性を定義しようとするが、リトレは定冠詞付きの「科学 (la science)」を用いることで、科学という営みをひとつのものとして捉え、それがいかに変化しつづけてきたかを問う。両者とも学問の進化を順を追って考えようとするが、リトレのほうがさらに通時的傾向が強いと言えるだろう。

新たな知の体系をもとめて

ここで改めて、本の紹介でなく自身の議論として書かれた記事を振り返ってみよう。該当記事をタイトルとともに挙げる――

- 8) 化学との関わりからみる生の科学
- 10) 精神生理学についていくつかの点
- 11) 正義概念の起源
- 12) 生物学から社会学を分かち根本条件について
- 17) 宇宙進化論についての実証的諸仮説

これらの記事は、コントの構想をもとにリトレが考えている学問の進化における変節点を検討したものが多く、タイトルからはわかりにくい10)は、これまで形而上学的議論で扱われてきた人間の知的・精神的能力の研究に生理学を導入しようとするもので、生物学と心理学、ひいては歴史学との接続点となっている⁹⁾。もちろんリトレ自身がこうした記事を書いた理由には、学問分野を横断する著作があまりなかったために本を紹介する形で記事を構成できなかったことも挙げられるのだろうが、やはり彼自身の興味が、諸科学に共通する特徴に対してよりも、その変節のダイナミズムに対して向けられていた事実を示している。

そして非常に興味深いことに、変節点への興味は、最終的に自身が構築する体系をも危うくするのである。序文の冒頭においてリトレは、科学という営みは社会学で完成したという見方を示す――

そして最後に、生物学なしには社会学はありえない。いま「最後に」としたのは、社会学こそあらゆる学問をすばらしく締めくくる (la sociologie couronne tout savoir) からである。こうして統合された全体の外に位置し、全体へと配置できないようなより包括的な特性、力、学問領域は存在しない。[III]

リトレはここでも社会学を諸学の女王とするコントの代弁者のようでもあり、諸学の段階的發展によって定義した学問体系の外に学問は存在しないと断言している。しかしながら、その動的なもの・不安定なシステムへの興味は、自身の体系を静的な完成したもののままにすることもやはり許さない。

さきほど挙げたタイトルのなかで 17) については説明していなかったが、最後におかれたこの記事こそ、自らの体系の「外」へ向かおうとするものとして配置されているのである。序文末尾に説明がある――

かくして諸科学は、数学から社会学にいたるまでヒエラルキーを形成しており、その順序は逆になることはなかったし、ありえないのである。そこにはすべてが含まれている――数、天体の理解、物質の物理的特性、物質の分子結合、有機物質という形をとって発達する生命、社会と文明でおこる諸現象。このような連続性を、段階を上るごとに増していく偉大さのもとに捉えられれば、我々は人間の知のもっとも高度な主題へと到りうる。

しかしながら、傲慢な満足感による印象のままに、読者に本書を閉じてほしいわけではない。私は論集を終えるにあたって、宇宙、世界、地球、生物種に対して相対的な仮説の提示をおこなった。人間精神の限界に触れさせるのにこれ以上ふさわしいものはない。人間精神は、「宇宙発生源」という野望に満ちた語で表そうとしているものに辿り着こうとしたとたんに、驚異的な数多くの段階をつぎつぎと超えていく。だが、人間精神が旅をする空間がいかに広くとも、そして人間精神がいかなる広大無辺なものを横断しようとも、ほかのいくつもの計り知れないものが遙か彼方にひらけるのだ。そして人間精神の無知を諦観とともに受け入れて戻ってくる。しかし、さらに知りたいと果てしなく憧れつづけるほどには、人間精神は自らが知っていることによって鍛えられてはいるのである。[VII-VIII]

リトレは収録論文に一貫性を与えるために書いてきた序文の最後で、自らが作りあげた体系を相対化する方向に向かっている。完全に見える体系においても、やはり不確定要素――引用では「広大無辺なもの、計り知れないもの (immensité)」という語で表されている――が出現し、人間精神の限界を示すものだとあえて語る。さらに、論集をしめくくる最終記事は、人間精神の限界を感じてもらうのもっとも適した主題だという解説が与えられる。

観察できる事実に基づいた確実な議論をおこなうと同時に認識の限界を自覚し、その議論を相対化するというのは、非常に実証主義的な態度だと言える。ただしリトレは、人間の知的営みを相対化して論を終えてはいるものの、結語

としては、自らの無知を受け入れながら新たな知に焦がれつづける人間精神の逞しさへの言及を選んでいる。ここには、検討不可能な範囲をひとまず保留にして検討可能な部分にとどまって追究に努めることへの覚悟とともに、鍛えられた人間精神への何らかの期待をも読みうる。

だとすれば、何についての期待だろうか。そもそも、本書の記事のうちにはリトレ自身が新たな学問体系を模索しているような箇所も認められ¹⁰⁾、序文冒頭で提示される完成した学問体系とは矛盾している部分もある。完全な体系について明言しながら、言外に体系の破壊と再構築の可能性が示されていることから、期待されていたのが知に対する人間精神の飽くなき憧れが知の体系の再編を引き起こすことだと推測できる。そして序文最終節で、リトレが「人間」ではなく「人間精神」を主語としている点にも注目したい。主観的次元を導入したコントとは異なり、彼の予感していた筋書きが、「精神」が自ら探究をつづけた結果として学問が構造変化を起こすことだとすれば、「客観化した主観」とも読める「人間精神」という言い方には、主観的次元と客観的次元の境界に何とかとどまろうとする意志が窺えるのである。だからこそ学問の変化も、人間精神が自らの性質に刻まれた探究をおこなった結果として——つまり必ずしも変化を目指した結果でなく——起こるといふ、能動的とも受動的とも言える起こり方で描き出される。最終論文は、本書の出版直前の1872年末に発表された。科学についての記事を40年近く書きつづけてきたリトレは、知に対する欲求が生み出す絶対性と限界の認識により生まれる相対性の繰り返しを原動力として学問が発展していく可能性を捉え始めていたのかもしれない。

*

以上、『哲学的視点から見た科学』の構成と序文を取り上げ、リトレが人間の知の営みに向けた視線を検討してきた。ゾラをして「世紀の男」と呼ばせしめたリトレ——ユゴーとほぼ生没年が重なっているため彼の紹介にあたってユゴーと並置する論者もいる¹¹⁾——は、学問の専門化・分化が進んでいくなかで、学問全体を包括的に捉え、その変化について考え抜いたことをもって18世紀と20世紀をつなぐ世紀を象徴する人物と言えるのかもしれない。

註

- 1) ただし経済的窮乏だけでなく、患者と接したときに完全に正確な診断を下せないことへの後ろめたさも原因だったという指摘もある (voir Patrick CLERVOY, «Émile Littré (1801-1881). Les premiers mots de la psychiatrie», *Perspectives Psy*, vol. 43-1, 2004, p. 73)。これは、リトレが生理学を個体差に依存したものであるとして、物理学や化学と差異化していることも思い起こさせる。
- 2) Émile LITTRÉ, *Science au point de vue philosophique*, Paris : Didier et C^{ie}, 1873. 本作品からの出典は引用・参照の末尾 [] 内に同版のページ数を記す。
- 3) 大きく違うのは心理学の扱いであろう。これが「リトレが実証主義に医学を導入した」(CLERVOY, art. cité, p. 72) と言われる所以でもあろうが、リトレと心理学の関係については、その精神生理学論を検討するときに詳述したい。
- 4) コントとリトレの関係についてはアニー・プティの次の研究に詳しい—— Annie PETIT, «Comte et Littré : Les débats autour de la sociologie positiviste», *Communications*, n° 54, 1992, pp. 15-37 ; «Comte revu et corrigé : le cas Littré», *Revue européenne des sciences sociales*, n° 54-2, 30 novembre 2016, pp. 69-88.
- 5) Annie PETIT, «Comte revu et corrigé : le cas Littré», éd. citée, p. 71. またアンリ・グイエは、『実証政治体系』に導入された主観性と人間中心主義が、リトレには受け入れがたかったのだと論じている (voir Henri GOUHIER, «Émile Littré et la philosophie», *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 125^e année, n° 4, 1981, p. 612)。
- 6) GOUHIER, art. cité, p. 608. ちなみにグイエは、「支点 (point d'appui)」という表現がメーヌ・ド・ピランのものと同断ったうえで使用している。
- 7) 平尾浩一「エミール・リトレの辞書編纂——その理論と実践について」、『関西フランス語フランス文学』第9号, 2003年3月, 5頁。
- 8) Auguste COMTE, *Cours de philosophie positive*, Paris : Rouen Frères, t. I, 1830, p. VIII.
- 9) 11) は少し例外的と言えるかもしれない。ただしこれは、正義という概念を考えるうえで、歴史的視点を導入するとともに、生理学的視点からも捉えようとするものであり、生物学から社会学へと向かう上での方法論を実践で示したものと読める記事である。
- 10) とりわけ興味深いのは、コントとの態度の違いが指摘される心理学を巡っての議論において、リトレが数学を例に挙げて、心の研究を一から構築できないかを自問していることである [329-330]。これについては、稿を改めて、10) の精神生理学を考察しながら検討したい。
- 11) CLERVOY, art. cité, p. 72.